國學院大學学術情報リポジトリ

A Study of the Concept of Self-sacrifice in Miyazawa Kenji's Works : with Special Reference to Gusuko Budori no Denki : Special Issue Modern Japanese Literatures its Transportation and Crossing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: George, Pullattu Abraham メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000242

宮澤賢治作品に顕現している「自己犠牲」の一考察

―「グスコーブドリの伝記」の主人公ブドリの殉死を中心に―

プラット・アブラハム・ジョージ
Pullattu Abraham George

一、はじめに

宮澤賢治の作品の中で一番多く見られる哲学はおそらく「自己犠牲」・「自己否定」の概念であると言える。「よだかの星」「銀河鉄道の夜」「グスコーブドリの伝記」などの短編や「雨ニモマケズ」や『春と修羅』の「序」などの詩に具現されている主要思想は「自己犠牲」の思想である。特に、「雨ニモマケズ」の一つ一つの行に潜んでいる思想は苦しみの大海に悶えている同朋を、自分自身を犠牲にしてまで救い上げ、平和で、幸せな生活ができるようにしてあげたいという隣人愛に溢れた、人道主義的な思想である。「東ニ病気ノコドモアレバ／行ッテ看病シテヤリ／西ニツカレタ母アレバ／行ッテソノ稲ノ束ヲ負イ／南ニ死ニサウナ人アレバ／行ッテコハガラナクテモイヽトイヒ／北ニケンクヮヤソショウガアレバ／ツマラナイカラヤメロトイヒ」（中略）と続くこの詩に映っている賢治の顔は、人類の幸福ばかりを希う人道主義者の顔でないとなんだろうか。他人の幸せを願う、賢治の人道に基づいた世界観の起因は法華経にあるという説もあれば、幼少年時代に親から教え込まれた浄土真宗の「捨身」の概念に深く根付いているという説もある。それに、

「法華経」と「浄土真宗」の影響がそれぞれ五分五分であるという説もある。また、キリスト教の教えの面影も幾つかの作品に潜んでいることは、最近何人かの研究によって明確になっている。[1]

賢治作品を熟読しながら当時の彼の振る舞いや彼が常時接触していた人々のことなどを追及してみると、彼の作品に潜んでいる哲学と思想は、自己救済を最終目的とする法華経的な利他主義、極楽浄土で菩薩を目指す浄土真宗的な他力本願説、キリスト教の自己否定的な隣人愛の概念、八世紀ごろからインドで広く説かれてきたアドォイダ哲学の「不二一元論」を思わせるような宗教思想、それに自然科学の功利主義などから影響を受け、形成されてきたような気がする。[2]こういう賢治思想の根源を探るとき、彼の思想・哲学の全てが盛り込まれている、「雨ニモマケズ」、「『春と修羅』の「序」の詩」、「銀河鉄道の夜」及び「農民芸術概論綱要」の四つの作品に具現されている哲学を参考にしながら、作品の分析解釈を行うべきだと思われる。

二、賢治作品に見られる「自己犠牲」の分類

賢治作品に見られる「自己犠牲」の概念を主に二つの種類に分ける事が出来る。一つは、自己救済を目的とする自己犠牲で、もう一つは利他主義・隣人愛を基に自己救済よりも他人の幸福を優先する自己否定的な自己犠牲である。前者は浄土真宗の教えに基づくもので、この世に生きている間自力で成仏することが不可能であるが、「捨身」を中心とする自己犠牲で死後の成仏が可能だと言う教えである。一見「利他主義」的な行動であるが、その裏に隠れている実際の念願は死後の成仏である。それに対して、後者は自己というものを否定して、献身的に他人（隣人）の幸せのために自分を犠牲にするという、「利他主義」・「隣人愛」に基づいた修行的行動のことである。[3]

前者の実例として「よだかの星」の話や「銀河鉄道の夜」の中の「蠍の話」などに見られる人の幸せのためなら自分の命まで惜しまないと祈るが、実は自分の救済を第一目的とする自己犠牲である。それは、やはり、生きているままの自分には人に喜び・幸せをもたらす能力や業がなく、自分の人生は何の価値も持たない無駄なものだと悟った者の決心きわまりの挙句、死後の浄土を目指し、それによって他人に幸福をもたらす最終的手段として行なう〈自己犠牲〉、極端に言えば仏教で言う「捨身」なのであろう。言い換えれば、自分の命が危険な状態にあって、逃げ道もほかの選択肢もなく、死ぬしかないということを

悟ったとき、はじめて自己犠牲について考えるということである。「死後の浄土を目指す」ということは「自己救済」のことで、自己を犠牲にすることによって他人の幸福を実現するとともに自らの救済も目論んでいるということである。

周知のとおり、浄土真宗の教えでは、現世は穢れと苦悩に満ちた「穢土」で、現世に執着を持ち、刹那的に現世の魅力に魅かれてしまう人は成仏できない。つまり、現世において本当の浄土を見つけることは不可能である。美しくて幸福な「浄土」は死後世界にあるもので、それを目指して人生を送る必要がある。[4] 幸福な永遠の浄土を追求する人は、せめて自分の臨終（りんじゅう）に際して自己犠牲的な死を遂げることによって、この世の同朋に幸せをもたらすこともできるし、何よりも自分自身の人生の最終目的である来世・死後世界の美しい「浄土」を確保することも可能となる。「よだかの星」のよだかの行動も、「銀河鉄道の夜」の中の蠍の祈りもこのような浄土真宗的な自己犠牲の具現であるに違いない。

例えば、「銀河鉄道の夜」に出てくる蠍の話をみてみよう。イタチに襲われて急所に追い詰められたときの蠍は、〈…どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちに呉れてやらなかったろう。そしたらいたちも一日のびたらうに。どうか神さま。私の心をご覧ください。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい。[5]〉と祈るのだが、それはおそらく他の選択肢がなく、自分はもはや死ぬと言うことに気付いたからであろう。もし何か逃げ道がった場合、彼は必ずそこを通って自分の命を助かったし、他人の幸福などについて考えることなどは絶対しなかったと思われる。

また、「よだかの星」のよだかも危機にさらされたとき、似たような嘆きをしている。鷹に脅かされたよだかは、自分の巣をちゃんと片付けてから、弟のかわせみに別れを告げて、鷹がやってくる前に空のかなたへ逃げようとする。「…　どうぞ私をあなたの所へ連れてって下さい。灼て死んでもかまひません。私のやうなみにくいからだでも灼けるときに小さなひかりを出すでせう。どうか私を連れてって下さい。[6]」と太陽をはじめ、夜空の星たちに必死に祈願するよだかのその時の気持ちは上に述べた蠍の嘆きと変わらない。死ぬ直前に殺生を含め、その日まで自分の人生の中で積み重ねた罪を悔い改め、心を清めて死を迎えるよだかの行動にはキリスト教的な側面も深く含まれているに違いないが、[7] よだかのその行動は完全に自己救済を前提とした「自己犠牲」つまり「捨身」であると言える。

しかし後者の場合、自己の存在とか自己の救済は否定され、隣人の幸せだけが行動の刺激となる。例えば、「銀河鉄道の夜」の中の青年と連れの子供たちのケースを見てみよう。

〈…もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となって、どうか小さな人たちを載せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのために祈って呉れました。けれどもそこからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても押しのける勇気がなかったのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思ひましたから前にゐる子供らを押しのけようとしました。けれでもまたそんなにして助けてあげるよりはこのまゝ神のお前にみんなで行く方がほんたうにこの方たちの幸福だと思ひました。それからまたその神にそむく罪はわたくしひとりでしょってぜひとも助けてあげようと思ひました。けれどもどうして見ているとそれができないのでした。子どもらばかりボートの中へはなしてやってお母さんが狂気のやうにキスを送りお父さんがかなしいのをじっとこらへてまっすぐに立ってゐるなどとてももう腸（はらわた）もちぎれるやうでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすっかり覚悟してこの人たち二人を抱いて、浮かべるだけは浮かばうとかたまって船の沈むのを待っていました。[8]〉

この青年は、遭難にあった船から逃げ出そうとする乗客を押しのけて救命ボートに乗り込む体力を十分持っていた思う。そして、溺れ死を避けることが簡単にできたのだろう。しかし彼はそれを怠った。どうして怠ったかというと、自分を救済するとなると、自分以外の何百人かの命が犠牲になってしまう。それを避けるために、そして数限りのない被災者の幸福を実現させるために、自分と連れの子供たちの命を捨てるしかない。自分に与えられた幾つかの選択肢を利用しないで、彼が進んで死を迎え入れたのである。そこに見られる人道主義的人生観はただ「慈悲」だけに基づいたものというよりも、おそらく仏教の「慈悲」とキリスト教の「隣人／同朋への愛」に基づいたものであると考えた方が正しいかも知れない。

「グスコーブドリの伝記」の主人公、ブドリの行動もそれにすごく似ているものである。つまりこれらの場合、自分が愛おしいというナルシスティックな自己満足（自己陶酔）という側面も自己救済の目論見も見られない。

三、「グスコーブドリ」の自己犠牲の実相

私は「グスコーブドリの伝記」の主人公であるブドリの自己犠牲的な行為は「隣人愛」に基づいたものではないかと以前から思ってきた。ブドリの殉死は、「菩薩の捨身供養」であるとか「自家族に対する愛」の表現であるとかと言う先行研究がたくさん出ている。例えば、土佐亨は「『グスコーブドリの伝記』私見」の中で、「「ブドリ伝」は「薬王菩薩本事品」の故事の、たぶんに現代的・現実的翻案と言ってよかろう。賢治は、ブドリに喜見菩薩を写しつつ、自己の捨身の供養をも表象したのであった」と解釈している。[9] この土佐説のような論じ方は従来から続く一般的な論じ方で、賢治の浄土真宗・法華教と言った仏教信仰のみを膨張して見せながら、賢治作品に見られる他の宗教の影響はありもしないようなものであると見せかける企みに他ならない。また、松岡幹夫は、「グスコーブドリの伝記」を「これは宗教的な自我の拡大が科学の力を得て人々を救い、それによって人々を大きく包む自我も救われるという物語のだ」と評価している。[10] 松岡説も基本的に自我の救いが最終目的にしているので、捨身して菩薩になるという説とあまり変わらない。

これに対して、栗原敦は「ブドリの両親が、こどもたちを生きのびさせるために、強い決意で森の奥に去っていったように、ブドリの選択は、たくさんのブドリのお父さんやお母さんやたくさんのブドリやネリへの激しい愛の表れ以外のなにものでもなかったのである」と論じている。[11] また、秋枝美保は「父母の死によって生を得たブドリが、今度は自らの死をもって他の生命の存続を助けるという一貫した流れを賢治は描こうとしているのである」と説いている。[12] 中野新治はブドリが十歳、ネリが七歳になるまでのブドリ一家は非常に幸せな家族生活を送っていたのに、旱のような天災の結果、突然家族の幸福が不幸に変わり絶滅していくことを指摘しながら、「その至福の中で育ったブドリは以後この聖なる絶対性を破壊した自然と戦い、それを回復させるために自分の人生を献げたと言うことが出来る」と、ブドリの自己犠牲的な行動を解釈している。[13] 何れの場合も、ブドリの子ども時代の苦しみに満ちた体験が後の彼の人生の向きを定めたという理論である。つまり、こどものときこういう苦い体験をしなかったならば、ブドリの人格は作品中のブドリの人格とは違っていたのだろうという逆説も可能となる。

それでも、これらの各種の論説が極めて可能であって、どれも「なるほど」と思われるほどの論理的な根拠を持っているに

違いない。私もこれらの先行研究者の理論や主張に基本的に同意する。しかし、同時に私が賢治の作品に見られる自己犠牲的な行為の裏にはたった浄土真宗と法華経といった「仏教宗派」の影響しかないという論説に同意しかねる。

賢治にとっては法華経の奥義は自分の生命の真髄だったので彼の作品の内容も仏教・法華経の普及を目指したものであって当たり前である。そのため、先行研究者による今までの賢治論のほとんどは仏教の教義、思想・哲学や世界観を中心に行われてきたと思われる。しかし、それはしかも一方的に偏った研究ではないかと思わざるを得ない。なぜなら、賢治作品を精読していくと、中には仏教以外の宗教思想や哲学、特に日本伝来の民間伝承とか、キリスト教的なものが色濃く載っていることに気づくからだ。つまり、賢治は信心深い法華経信者であったにもかかわらず、キリスト教のような異宗教の教義や教えにも実際に触れる機会があったし、異なった宗教や宗派の善い教えを吸収して自分のものにすることによって自分の人生観・世界観を広めていこうと言う意欲もあった。だから、賢治の異宗教との関わりを、特にキリスト教の教えが彼に及ぼした影響を、蔑ろにして、賢治作品を、特に「グスコーブドリの伝記」を論じるとすると偏った理論しか出てこないばかりではなく、宮澤賢治という世界規模の詩人、作家、そして哲学者の人格と偉大さが小さくなってしまうおそれもある。

実は、18歳までの賢治は代わりやすい宗教観を持っていたと思うが、島地大等編の『漢和対照妙法蓮華経』を読むことによってすぐ気が変わり、子供のときから信じてきた浄土真宗を捨て、法華経信仰に無我夢中になった。それ以降、自分の信仰を変えようとは一度もしなかったが、キリスト教などの教えと教義に好奇心と興味を持っていたことは確かである。中学校時代から異宗教に、特にキリスト教にふれる機会があった彼には異宗教の教義や教えを知るための追究心があったことも確かである。その結果、「銀河鉄道の夜」をはじめ、賢治の作品の中にはキリスト教の思想やモチーフを取り入れたものが何篇も現れた。法華経に夢中していた賢治はなぜキリスト教的なモチーフや思想のある作品を書いたのだろうか。それは、おそらく法華経とキリスト教の人生観・宇宙観における類似性に気付いた彼は、両宗教のこういう類似性を強調するために「銀河鉄道の夜」のようなキリスト教的雰囲気が漂う作品を著作したのではないかという仮説と解釈ができるだろう。

賢治のキリスト教信者との交際を確定する研究は最近次々に出ている。また、賢治作品中でキリスト教的な雰囲気が描かれ

たもの、あるいはキリスト教的な表象やことば遣いなどが載っている作品もたくさんある。それに、中学校時代以降の賢治は数多くのキリスト教信者と交流を行い、彼らとよく意見交換をする機会が与えられていた。このことはすでに拙者を含め、何人かの研究者によって指摘されている。しかしこれらキリスト教者との賢治の交流の規模、その深さはどれほどであったのか暗示を与えてくれる資料はあまり残されていないことも事実だ。特に、賢治の書簡の中には賢治が一番交流をしていたと考えられるヘンリー・タッピング牧師、アルマン・プジェー神父、斎藤宗次郎などへ送ったものは一つも未だに発見されていない。しかし短歌や詩作品の中にタッピングとフジェーを主題としたものがいくつかあり、彼らとの関係は単なる名目的なものではなく、かなり根深かったものだったと言うことを暗示してくれる。[14]

上田哲（あきら）は、賢治の異宗教理解・異宗教による影響について、キリスト教のような異宗教との交流の結果、彼の内奥に「法華経を中心にした一種のシンクレティズム」[15]が形成したのだろうと指摘している。シンクレティズム（syncretism）とは、「哲学・宗教などの諸説（諸派）統合」である。上田はシンクレティズムを「相反するあるいは互いに異なる二つ以上の宗教が相互に接触することによって生じる意識的あるいは無意識的融合を指す宗教学用語である」[16]と定義している。

つまり、似たような教え、または矛盾している教えを教義としている諸宗教の諸説を何の違和感もなく吸収して内面で適当に統合・調整を行って一つの統一した思想として表現することはシンクレティズムである。賢治の異宗教受容は上田哲の論じるシンクレティズムほど整ったものであったのかどうか疑問を持つが、明らかに賢治の心底に法華経（仏教）が中心になってできた一種の宗教構造が定着していたと思われる。それを図式化すると上の通りになると思う。

図１：賢治思想の基となる宗教シンクレティズム

また、上田氏は、幼少年期を家庭の浄土真宗の雰囲気の中

で育てられ、青年期になると「参禅を経て熱烈に日蓮に帰依した賢治の作品世界には、確かに色濃いパンティシズムと仏教的思想がみられる」[17]とも指摘している。パンティシズム（pantheism）では、神と宇宙を同一にみなし、あらゆるもの全ては神の現れであると考え、そのゆえ、それら全てに神の存在をみなし、その全ての神々を信じ、崇拝するという民間伝承的な信仰体系である。パンティシズム系の宗教の特徴の一つは、ヒンドゥー教のような多神教も同様だが、異宗教に対して排他的な態度を取れないことである。

子供時代からきっと異宗教の様々な教えに接触して来たと考えられる賢治の心にはキリスト教をはじめ異宗教の教義を受け入れる寛大さがあったので、異宗教の神々に興味を持ち、好奇心を持っていただろう。賢治における各宗教の影響はどの程度であったのか、正しくはかる物差しはないかも知れないが、まぎれもなく法華経の影響力は一番強かったことは、誰でも頷くだろう。二番目に大きい影響力を持っていたのは浄土真宗で、その次にキリスト教、民間伝承（民族宗教）の順番になるだろう。この比率は図2に示された。

では、宮澤賢治の人道主義的な世界観の源はどこにあるのだろうか。厳格な浄土真宗の家庭の長男として生まれ育てられた賢治の心には、子供時代から生き物に対する慈悲と同情が芽吹き、後の大自然との絶え間ない接触のうちその芽が大きく生え伸びた。初めは浄土真宗の影響を受け、青少年期および青春期において法華経の教えに左右された彼の内心では、自分という現象はこの宇宙体系から切り離せない一つの複合体で、〈すべてがわたくしの中の皆であるように／みんなのおのおののなかのすべてですから〉[18]、「自分」というものの単独的な存在は有り得ないという真実を抱えていた。つまり、個人の意識は宇宙意識の一部かそのもの自体であるが、同時に「私」という現象の中に宇宙全体が存在しているということである。このような状態の中で始めて皆の幸福があり得るのである。社会の一員として各人は他人の幸福を目指して行動することによって、「世界ぜんたい幸福になり」個人も幸せな人生を送ることができる。つまり、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」[19]

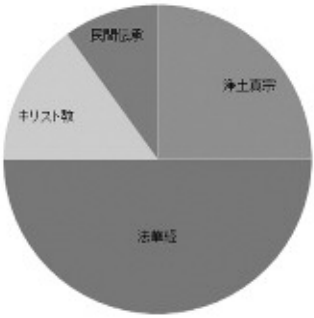

図２：賢治思想における各宗教の影響

のであるというのが、賢治の根本的な世界観である。

しかしそのために、「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化[20]」していく必要がある。それは「古い聖者たちがふみまた教へた道[21]」でもあるが、普通の個人にとって「自我」を捨てることは簡単にできるものではない。それにはかなり修行が必要である。賢治が言っている「古い聖者」とは、おそらくインドや日本の昔の修行者を暗示しているのではなかろうか。中には自分の悟りや、自分が菩薩になることだけを考えて行動する者もいようが、賢治の考えている修行とは、「世界が一の意識になる」ための修行で、その段階までたどり着いた人間には「己」というものは存在しなくなる。この様な人間は賢治の言う「銀河系を自らの中に意識し」て行動する人間となる[22]。そして、無執着の心を持ち、自己利益のこと一切気にしない人間にしか自己犠牲や自己否定の行動は行えない。つまり、自己意識と宇宙意識は不二であることを悟った人間にしか利他主義的な、隣人愛に基づいた行動が出来ない。

それで賢治は『農民芸術概論綱要』の中で「新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある／正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである／われらは世界のまことの幸福を索ねよう　求道すでに道である」と説いたのであろう[23]。

これはインドの「アッドイダ」(Advaita) 哲学にすごく似ている考え方である。「アッドイダ」哲学によると、この世は非現実的で「マヤ」である。実存するものは遍在の「根本原理」、つまりブラフマン（Brahman）だけで、個人もブラフマンである。言い換えれば、自己意識〔アトマン〕も宇宙意識〔ブラフマン〕も一つとなっているということである。このようになると、個々の自己意識〔アトマン〕はすべて、いわゆる宇宙意識〔ブラフマン〕の部分となり、言い換えれば、私という個人の自己意識〔アトマン〕は他の人々の自己意識に入っている一方、他のすべての人々の自己意識が「私」の自己意識〔アトマン〕の中にも入っていることとなる。〈すべてがわたくしの中の皆であるように／みんなのおのおののなかのすべてですから[24]〉と歌う詩人の心理にはこの「アッドイダ」哲学の思想が深く根付いているような気がしてすまない。そこで賢治が、自分という現象を〈あらゆる透明な幽霊の複合体〉と考えたのであろう。

また、Brihadaranyaka Upnisad（ビラハダラニャカ・ウパニシャッド、1．4．10）の中には、Aham brahmasmi（アハム　ブラマスミ、私はブラフマンで、同持にアトマンである）

という有名なスートラがあるが、私というものの体が滅びてしまうが、不滅しないものは自分のアトマンだけで、そのアトマンはブラフマンであると教えている。このような考えを持つには誰でも、自分の物理的「存在」、つまり自分の身体が絶滅するもので、不滅なものはやはり「魂」（アトマン）だけだということに気づくことが必要だ。言い換えれば、自分の体はすべてだと考える人は「偽りの自我」を持ち、自分はブラフマンだと考える人はかえって、「真の自我」を持つことになる。このブラフマンはあらゆるすべてのアトマン（魂＝精霊）の複合体なので、自分も他人も同じもので、世界全体が幸福にならない限り自分という個人の幸福がありえないことになる。そして、みなの幸福を達するために不可欠なものは「偽りの自我」を捨てることである。つまり、自己否定的自己犠牲をすることである。このように「自己意識」と「宇宙意識」（アートマンとブラフマン）が一体化した人の中に作動する感情は「慈悲」であり、「隣人愛」である。彼には「欲」もなければ、「期待」もなく、どんなに馬鹿にされても憤慨せず、「イツモシヅカニワラッテヰル」[25]顔で、人の世話をする。

四、ブドリの隣人愛に基づいた自己否定的自己犠牲と殉死

上述の通り、グスコブドリの殉死に纏わる論説がたくさんあるが、中でもっとも面白いと思われたのは、ブドリの死は、「たくさんのブドリのお父さんやお母さん、たくさんのブドリやネリ」への激しい愛の表れであるという栗原敦説、「父母の死によって生を得たブドリが今度は自らの死をもって他の生命の存続を助ける」という秋枝美保説である。それに、「「グスコーブドリの伝記」において、食料を残していった母親の子供に対する強い愛情は、ブドリの中で両親に対する感謝の気持ちとなった」という大島説も重要である。[26]

いずれの場合も、ブドリの殉死は自分の周りにいる同朋たちに自分が経験したような苦悩を経験させたくないから、彼らの幸福のために自己犠牲的な死を迎えたのだという響きがある。はたして、ブドリが自己犠牲的・自己否定的な殉死を選択した裏には子供時代のつらい体験や親への感謝の感情が本当の理由として潜んでいたのか、それともブドリは生れつきこんな性格の人間だったのか、疑問に思わざるを得なくなった。なぜなら、

ブドリと言う登場人物を通して晩年の賢治が自分の思想を伝達しているからである。その思想と言うものは生前に彼が携わってきた、浄土真宗、法華経、民間伝承、キリスト教と言う四つの教えによって形成されたものであって、長い迷いの挙句、具体化したその思想や宇宙観をブドリと言う理想人物を通して表現したものである。つまり、ブドリの子供時代の辛い体験の有無を問わず、作品の中のブドリの思想とその作家である賢治の思想は全く同じであると言える。

実は、両親を失い、見ず知らずの人に妹が攫（さら）われ、住んでいる家がてぐす工場の主人に奪われたときのブドリの反応は受動的で、しかも無頓着であった。ブドリにとって肉親や自家への執着よりも大切なものは隣人の幸せだった。自分の家がてぐす工場に変わったことを知ったとき、憤慨するどころか、驚きの表情さえその顔に表れなかった。逆に、てぐす工場の主に雇われたことを嬉しく思い、彼の指図に丁寧に従っている。そして、「その晩ブドリは、昔の自分のうち、いまはてぐす工場になってゐる建物の隅に、小さくなってねむりました」。この「小さくなってねむりました」には非常に深い意味が含んでいると思います。自分と言う個人の幸せな存在を否定して、他人の幸福ばかりを念頭にしているブドリの心がそこに映っている。人（隣人）の世話に携わる者は自ら小さくならないと自己否定的な世話ができないのである。「慾ハナク／決シテ瞋ラズ／イツモシヅカニワラッテヰル」ブドリは、自分の家族、財産、人生などについて一度も思い煩ったことはない。

「グスコーブドリの伝記」は〈ありうべかりし賢治の自伝〉（栗原敦）だと言われるが、考えてみれば賢治もブドリのように生涯独身生活をおくったのである。賢治はそれを、「私は一人一人について特別な愛といふようなものは持ちませんし持ちたくもありません。さふいふ愛を持つものは結局じぶんの子どもだけが大切といふあたりまえのことになりますから」と言って正当化している。ここでいう「愛」とは、「執着・欲望」の対象となる愛のことだと思う。何か特別なものに執着を持ったり、あるいはある一人の人間にだけ愛着を持ったりすると、本当の意味での隣人愛に基づいた行動はできないことは確かである。この手紙の内容を熟読してみると、ルカによる福音書第14章25節から27節、33節　〈もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。・・・だから、同じように、

自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない〉と、マタイによる福音書第16章25節〈わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る〉のだというキリストの言葉があたまに浮かんでくる。イエス・キリストは人類を救う為に来た救済者であって、自分が辿った道を従いたがる人はこの世の如何なるものにも執着を持ってはいけないと教えている。言い換えれば、隣人の幸せを目指して行動する人は自己を否定し、親など親戚を捨てて、離欲の人生を送り、人の奉仕に献身的になるべきである。

ブドリはおそらく人の幸福だけを心に抱いていた一人の良き隣人ではなかったのか。そして、彼の自我意識は「個人から集団社会宇宙と次第に進化」して、最後に隣人愛へと進化していたのである。結論的に、ブドリの行動は隣人愛に基づいた自己否定的自己犠牲の行動であったと言えるだろう。

五、隣人愛を思わせる作品中のブドリの行動

家族を失い、住まいを奪われたブドリにとって自分自身の生存よりも見知らぬ隣人の幸福は唯一の目的だった。そのためにいかなる手段を取るにも遠慮がちではなかった。その第一段階として、やったことは学問をして自分の知識レベルを高めることだった。それで、てぐす工場の仕事がなくなった後で、ブドリは新たな学問の道をたどり始めたのだ。

「ブドリが次の日、家のなかやまわりを片付けはじめましたらてぐす飼いの男がいつも座ってゐた所から古いボール紙の函を見附けました。中には十冊ばかりの本がぎっしり入って居りました。開いて見ると、てぐすの絵や機械の図がたくさんある。まるで読めない本もありましたし、いろいろな樹や草の図と名前の書いてあるものもありました。…ブドリは一生けん命、その本のまねをして字を書いたり、図をうつしたりしてその冬を暮しました。[29]」

これはブドリの新たな学問の始まりであったが、間もなく農民の赤ひげに雇われ、稲作に励むようになると、自習の方が一旦中止になるが、後に赤ひげの主人からもらった書物を使って再び独学を始めるブドリの頭にその時あったのは、旱や冷夏に伴う飢饉で苦しむ隣人たちの生活を何とかして引き上げることばかりだった。

赤ひげの補佐として水田で稲作に励んだ彼の献身的な仕事ぶ

りを見ると、まるで自分自身の田圃（たんぼ）で、自分の家族のために苦労しているような感じをする。そして、イネ（オリザ）に病気がかかった時、主人よりもブドリの方が一層悲しかった。「ブドリは主人に云われた通り納屋へ入って睡らうと思ひましたが、何だかやっぱり沼ばたけが苦になってしかたないので、またのろのろそっちへ行って見ました」[30]。ここに出てくるブドリの頭の中に自他の区別がなく、自分も他人も一つだという思想が浮き上がっていると思う。つまり、彼にとっては、宇宙上の全ての人間は互いに交じり合って、一体化している。

＜すべてがわたくしの中のみんなであるやうにみんなのおのおののなかのすべてですから＞、と歌った賢治の人道主義的な思想がここに現れているような気がする。これはおそらく法華経の「一念三千」論に由来した思想であると説く学者[31]もいようが、いずれ、賢治の目には「自己」も「他者」も一つになっており、他人（隣人）を自分より大切にしない限り世界せんたいが幸福にならないことになっている。

ブドリの他人（隣人）思いがより明確に表れている文章として、作品の中に次のようなものがある。クーボー大博士の所へ勉強しに赴いたときのブドリの感情である。「ブドリはいろいろな思ひで胸がいっぱいでした。早くイーハトーヴの市に着いて、あの親切な本を書いたクーボーという人に会ひ、できるなら働きながら勉強して、みんながあんなにつらい思ひをしないで沼ばたけを作れるやう、また火山の灰だのひでりだの寒さだのを除く工夫をしたいと思ふと、汽車さへまどろこくってたまらないくらゐでした」[32]。ここに出ているブドリの感情の中には「自己救済」の思考は全くない。あるのはただ自分の周りに苦しんでいる人々の救助だけである。つまり、＜東ニ病気ノコドモアレバ／行ッテ看病シテヤリ／西ニツカレタ母アレバ／行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ＞たがる賢治の感情がそのままブドリの感情に映っているのではないか。

また、自分の家族を全滅の渦に巻き込まれた天災（旱、冷夏など）に対する執念深い思いがブドリの脳裏に潜在していたことも否定できない。そして、これらの天災から農村の同朋たちを何とかして救済することこそは、ブドリの人生の役目と考えていたのも確かであろう。落ち付かない気持ちでいたブドリは、間もなくクーボー大博士の所へ行き、彼の推薦でペンネン老技師に師事し、「すべての器械の扱ひ方や観測のしかたを習ひ、夜も昼も一心に働いたり勉強したりしました」。そして彼は、優秀な技師となり、「イーハトーヴの三百幾つの火山と、その働き具合は掌（たなごころ）の中にあるやうにわかって来ました」[33]。それ以

降、ブドリは自分の人生を火山局の仕事にささげ、新たな農業技術や肥料の雨を降らす方法などを利用して、農民の暮らしを少しでも向上させることばかりをやってきた。その結果、数年間農民の農作物の収穫が豊富になり、飢餓と飢饉の恐れが減ってきた。その時のブドリのうれしさには限界がなく、彼は「はじめてほんたうに生きた甲斐あるように思ひました」[34]。この文章にはいかにブドリが隣人の幸福を希っていたのか明確に描写していると思われる。ここにいるブドリの心も思考も晩年の賢治の心と思考にぴったり合うものであると言っても間違いではなかろう。

しかし、再びやってきた冷夏のせいで米が又取れない状態となった。そのとき、一番悲しくなったのはブドリだった。「ところが六月もはじめになって、また黄いろなオリザの苗や、芽を出さない樹を見ますと、ブドリはもう居ても立ってもゐられませんでした。このまま過ぎるなら、森にも野原にも、ちゃうどあの年のブドリの家族のやうになる人がたくさんできるのです。ブドリはまるで物も食べずに幾晩も幾晩も考へました」[35]。他人の苦痛を自分自身の苦痛として受け取ったブドリは結局、自分の習得した知識を生かして大気温度を高める工夫を施行したのである。その工夫というのはカルボナード火山島を爆発させ、そこから出る炭酸ガスのせいで大気温度を上げ、米の栽培にふさわしい気候を人工的に作り上げることだった。しかし、島の爆発時にその最終操作を操る人がどうしても命は助からないという条件があるが、ブドリはその宿命を自分で進んで受け取る。つまり、皆に幸せをもたらすために、ブドリが自分の命を捨てようと決めたのである。ブドリには逃げ道は幾つでもあったが、彼は喜んでこの道を選んだ裏にはおそらく現実世界にて極楽浄土を実現することができるという法華経の教えと隣人愛を主張するキリスト教の影響が働いたのであろう。

六、終わりに

「グスコーブドリの伝記」の最後のブドリの自己犠牲の決心の言葉には自己否定に満ちた隣人愛の色彩が濃く見られる。自分のただ一人の血族である妹ネリに久しぶりに再会できたのに、残っている自分の人生を楽しく暮らすことを考えないで、進んでカルボナード火山を爆発させ、そのため殉死するという真実を堂々と選択したブドリの行動には、隣人の幸福ばかりを人生の目的にしている救済者の面影が見られる。上記のマタイによる福音書第16章25節〈わたしについて来たい者は、自分を

捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る〉というキリストの言葉通りの行動ではないか。「わたしのために命を失う」という言葉の間接的な意味は、「他人（隣人）のために命を失う」と言うことである。つまり、隣人のために自分の命を失う者、犠牲にする者はそれをきっと獲得するという教えである。自分が殉死する最終決定をとったときのブドリの謙った（謙遜の）態度は、平凡の人間にないものである。そして、「私のやうなものは、これから沢山できます。私よりもっともっと何でもできる人が、私よりもっと立派にもっと美しく、仕事をしたり笑ったりして行くのですから。」[36]といって、自分の人生の役目はどんなものかを見せようとしている。

注

（1）宮澤賢治には「浄土真宗」「法華経」「民間信仰」及び「キリスト教の濃い影響があったと言うことは真実で、この何れか一つの影響を抜きにして賢治及び賢治思想を正しく評価することは不可能であると筆者は以前から思っている。

（2）アドォイダ哲学の「不二一元論」を思わせるような宗教思想に賢治が実際に出会ったことがあるかどうかは確定されていない。しかし、彼の『春と修羅』の「序」の詩に潜んでいる哲学は非常にこのアドォイダ哲学の「不二一元論」に似ているので、さらなる研究が必要である。「自己犠牲」も「自己否定」も同じものであるという考えもあるが、筆者の理解では自己犠牲は最終的に自己の救済を目指すもので、その過程において他人も幸せになると言う思考である。それに対して、「自己否定」は自己救済を最終目的にしていない、自分の存在さえを否定する尊い考えである。つまり、こういう考えを持つ人にとって、他人の幸福は唯一の目標である。

（4）詳細は、柴田まどか『宮澤賢治　思想生涯　―　南へ走る汽車』洋々社、1996年を参照。

（5）宮澤賢治　「銀河鉄道の夜」『〈新〉校本宮澤賢治全集』第十一巻　筑摩書房　一九九六年　一六三頁

（6）宮澤賢治　「銀河鉄道の夜」『〈新〉校本宮澤賢治全集』第八巻　筑摩書房　一九九五年　八七頁

（7）「よだかの星」に見られるキリスト教的な思想については、原子朗著作『宮澤賢治とはだれか』早稲田大学出版部、一九九九年　とか　プラット・アブラハム・ジョージ執筆の「宮澤賢治の作品に見られる「非暴力主義」「自己犠牲の精神」と「菜食主義」の位置考察　―　インド人の観点から」国際日本文化研究センター発行『日本研究』第36集（平成19年9月）などを参照。

（8）宮澤賢治　「銀河鉄道の夜」『〈新〉校本宮澤賢治全集』第十一巻　筑摩書房　一九九六年

（9）土佐亨は「『グスコーブドリの伝記』私見」二一九～二二四ページ、『作品論　宮澤賢治』双文社、一九八四年

（10）松岡幹夫　『宮澤賢治と法華経：日蓮と親鸞の挟間で』昌平（しょうへいこう）黌出版会、二〇一五年、一六八頁

(11) 栗原敦「賢治童話名作館　グスコーブドリの伝記」（『国文学　解釈と教材の研究』　第三一巻第六号臨時号　學燈社　一九八六年、一四五頁
(12) 秋枝美保「グスコーブドリの伝記」論（『国文学　解釈と教材の研究』第三一巻第六号臨時号　學燈社　一九九二年、一〇四頁
(13) 中野新治『宮澤賢治・童話の読解』翰林書房　一九九三年、二〇〇頁
(14) 宮澤賢治のキリスト教徒との交際や、作品中のキリスト教的な思想、表象や雰囲気について詳しく知るには、上田哲自著『宮澤賢治　その理想世界への道程』明治書院、一九八五年、およびブラット・アブラハム・ジョージ・小松和彦編『宮澤賢治の深層：宗教からの照射』に載っているブラット・アブラハム・ジョージ執筆の「賢治作品に投影しているキリスト教的表象　―　一考察」三二三～三六一頁などを参照。
(15) 上田哲　『宮澤賢治　その理想世界への道程』明治書院　一九八五年二八四頁
(16) 前掲書　二八五頁
(17) 前掲書　一九四頁
(18) 宮澤賢治　「春と修羅」『〈新〉校本宮澤賢治全集』第二巻　筑摩書房一九九五年　八頁
(19) 宮澤賢治　「農民芸術概論綱要」『〈新〉校本宮澤賢治全集』第十三巻筑摩書房　一九九七年　九頁
(20) 前掲書　同頁
(21) 前掲書　同頁
(22) 前掲書　同頁
(23) 前掲書　同頁
(24) 宮澤賢治　「春と修羅」『〈新〉校本宮澤賢治全集』第二巻　筑摩書房一九九五年　八頁
(25) 宮澤賢治　「雨ニモマケズ」『〈新〉校本宮澤賢治全集』第十三巻　筑摩書房　一九九七年　五二一頁
(26) 大島丈志　「グスコーブドリの伝記」論　―　「家族」と「死」の観点から　―」千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書第61集『日本近代文学と家族（2）』所収
(27) 宮澤賢治　「グスコーブドリの伝記」『宮澤賢治全集8』筑摩書房、一九八六年、二三七頁
(28) 宮澤賢治　書簡：252a、【日付不明　高瀬露あて】下書（昭和四年）、『宮澤賢治全集9』筑摩書房、一九九五年、三四四頁
(29) 宮澤賢治　「グスコーブドリの伝記」『宮澤賢治全集8』筑摩書房、一九八六年、二三九頁
(30) 前掲書　二四四頁
(31) 松岡幹夫　『宮澤賢治と法華経：日蓮と親鸞の挟間で』昌平黌出版会、二〇一五年、一〇四頁
「一念三千とは、われわれの瞬間の心（一念）に宇宙の森羅万象（三千世間）が具わるとする説をいう。いわゆる独我論ではない。自己も他者も一念において三千の宇宙を具有するとの見方だ。自己と他者が互いに包み包まれるという、自他の相互含有を世界の真相と主張する。自己とあらゆる他者は無限に、自在に、交り合って存在していることになる。日蓮の遺文に、あらゆる人の心に釈迦がいると説かれるのも、この意である。。。」と松岡幹夫が解釈している。
(32) 宮澤賢治　「グスコーブドリの伝記」『宮澤賢治全集8』筑摩書房、一九八六年、二四九頁
(33) 前掲書　二五五頁
(34) 前掲書　二六五頁
(35) 前掲書　二六九頁
(36) 前掲書　二七〇頁